

林野庁朝倉地区治山工事（須川3）関係埋蔵文化財発掘調査報告

# 上須川古墳群

—福岡県朝倉市須川所在遺跡の調査—

2021

九州歴史資料館



## 序

本書は、平成 29 年 7 月九州北部豪雨の被害を受けた朝倉市における林野庁の治山事業である朝倉地区治山工事（須川 3）に伴い実施した、上須川古墳群の発掘調査報告書です。

本遺跡は朝倉市中央部の筑後川の北側に広がる朝倉山地に立地し、周辺には須川ノケオ遺跡、上須川石棺群、上須川遺跡、山後山古墳群など、古墳群が豊富に分布する地域です。また、朝倉橘広庭宮伝承地や長安寺廃寺など、古代にも有名な遺跡があり、歴史遺産に恵まれた土地と言えるでしょう。今回の調査では、古墳時代後期の古墳や小石室が見つかり、改めて古墳の分布の広がりが確認されたところです。

最後になりましたが、九州北部豪雨で被害を受けられた方々へ一日でも早い復興を祈念しますとともに、本書が教育、研究、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。なお、発掘調査に関係した機関や地元の方々を始め多くの方に御協力・御助言いただきました。ここに深く感謝いたします。

令和 3 年 3 月

九州歴史資料館

館 長 吉田 法稔



## 例 言

1. 本書は、林野庁による朝倉地区治山工事（須川3）に伴い、九州歴史資料館が令和元年度から2年度にかけて実施した上須川古墳群の発掘調査の記録である。
2. 発掘作業および整理作業、報告書作成は林野庁九州森林管理局の委託を受けて九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真は岡田諭が撮影した。
4. 本書に掲載した遺構図は岡田が作成した。
5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹の指導の下で実施した。
6. 試掘及び本調査で出土した遺物、本調査の図面・写真等の記録類は九州歴史資料館において保管している。
7. 本書第2図に使用した周辺遺跡分布図は、朝倉市教育委員会が2010年に刊行した『朝倉市内遺跡等分布調査報告書』（朝倉市文化財調査報告書第9集）の該当頁を加筆して作成したものである。また、第3図に使用した図は林野庁九州森林管理局朝倉地区民有林直轄治山対策室鳥栖治山事業所から提供を受けた図面と朝倉県土整備事務所から提供を受けた図面を合成加工したものである。
8. 図版4-1の写真は、現地で撮影した写真を基に当館の岡寺良技術主査がAgisoft社製metashapeで作成したものである。
9. 本書の執筆と編集は岡田がおこなった。

# 目次

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯と調査の経過	1
2	調査の組織	2
II	位置と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	発掘調査の記録	7
1	概要	7
2	1号トレンチ 1号墳(第4図)	7
3	2号トレンチ 1号小石室(第4、5図)	7
4	3・9号トレンチ 古墳状地形(第4、7図)	7
5	4・6号トレンチ(第4図)	10
6	5号トレンチ(第4、6図)	10
7	7・8号トレンチ(第4図)	10
8	出土遺物(第8図)	12
IV	おわりに	13

## 挿図目次

第1図	朝倉市の位置	3
第2図	周辺遺跡分布図(1/25,000)	5
第3図	調査対象地位置図(1/1,000)	6
第4図	調査区全体図(1/300)	8
第5図	1号小石室実測図(1/30)	9
第6図	5号トレンチ土層断面図(1/60)	9
第7図	3・9号トレンチ平面図及び断面図(1/60)	11
第8図	出土遺物実測図(1~13=1/3、14,15=1/2)	13

## 写真図版目次

1	1.2号トレンチ拡張掘削前(南から)	2.2号トレンチ作業風景(東から)	
	3.2号トレンチ1号小石室検出状況(東から)		
2	1.2号トレンチ1号小石室埋没状況(東から)	2.2、7、8号トレンチ調査状況(東から)	
	3.1号小石室と1号墳(西から)		
3	1.2号トレンチ1号小石室床面検出状況(西から)		
	2.2号トレンチ1号小石室床面検出状況(南から)		
	3.2号トレンチ1号小石室床面検出状況(北から)		
4	1.2号トレンチ1号小石室(photoscanで作成)		
	2.2号トレンチ1号小石室完掘状況(北から)		
	3.3号トレンチ拡張前状況(北から)		
5	1.9号トレンチ掘削前(北から)	2.3号トレンチ拡張石検出(東から)	
	3.3号トレンチ拡張石検出(西から)		
6	1.3号トレンチ拡張石検出(南から)	2.3号トレンチ拡張石取上後(東から)	
	3.3号トレンチ拡張断面1		
7	1.3号トレンチ拡張断面2	2.3号トレンチ拡張断面3	3.3号トレンチ拡張断面4
8	1.3号トレンチ拡張断面5	2.3号トレンチ拡張断面6	3.3号トレンチ拡張断面7
9	1.6号トレンチ掘削前状況(北から)	2.4、6号トレンチ完掘状況(東から)	
	3.5号トレンチ掘削前状況(南から)		
10	1.5号トレンチ完掘状況(北から)	2.5号トレンチ東壁断面	
	3.7号トレンチ掘削前状況(南から)		
11	1.8号トレンチ掘削前状況(北から)	2.7、8号トレンチ完掘状況(北から)	
12	上須川古墳群出土遺物		

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯と調査の経過

平成 29 年 7 月九州北部豪雨により、多数の山腹崩壊と流木等が発生し、朝倉市などで甚大な被害が発生した。林野庁九州森林管理局では、福岡県知事からの要請を受け、朝倉市（旧朝倉町、旧杷木町）の民有林において、平成 30 年 4 月から「朝倉地区民有林直轄治山事業」に着手し、治山事業による復旧整備を実施している。本工事施工箇所においては、地すべり現象が確認されたことから、山腹斜面直下に位置する住宅の保全や朝倉市道の通行の安全を図るため、地すべり対策工事に着手した。

この地すべり対策工事に関して、令和元年 5 月から関係機関と協議を重ね、7 月 9・10 日の朝倉市文化課の試掘で古墳、古墳状の地形、および小石室を確認し、遺物も出土したため、埋蔵文化財包蔵地として周知化した。協議の結果、工事の影響を受けない 1 号墳を除く約 700m<sup>2</sup> に対して本調査を実施することになり、10 月 1 日付けで発掘調査の委託契約を締結した。発掘作業は令和 2 年 1 月 14 日から 7 月 31 日まで実施し、終了次第、令和 2 年度中に整理作業・報告書作成を実施した。発掘作業の経過は下記の通りである。

- 1 月 14 日 発掘作業開始。作業員投入。地形測量準備。
- 1 月 16 日 地形測量開始（～2 月 4 日）。
- 1 月 24 日 Tr.5 調査開始（※ Tr.1～4 は試掘トレンチ）。若干遺物が出土するも遺構なし。
- 1 月 27 日 埋蔵文化財調査の着手報告（1 九歴第 438 号-8）
- 2 月 5 日 Tr.2 拡張調査開始。以降試掘トレンチの拡張および新設。遺物少量出土。遺構無し。
- 2 月 14 日 古墳状の高まりに対する Tr.3 拡張、Tr.9 調査開始。掘削深度 1.4m で大型の片岩の分布を確認するも、傾斜しており、石室なのか自然のものか判断付かず。
- 3 月 6 日 令和元年度調査終了（次年度継続）。
- 6 月 3 日 令和 2 年度調査開始。
- 6 月 12 日 Tr.3 写真、図面記録作成。古墳状の高まりは自然地形であると結論づける。
- 6 月 15 日 1 号小石室調査開始。Tr.5 調査再開。
- 6 月 29 日 各トレンチの図面作成。
- 6 月 30 日 1 号石室実測図作成開始。
- 7 月 1 日 各トレンチ完掘状況写真撮影。
- 7 月 16 日 各トレンチ等高線図作成。
- 7 月 20 日 1 号小石室解体。記録作成。
- 7 月 29 日 1 号小石室完掘状況写真撮影、実測図作成。1 号小石室調査完了。
- 7 月 31 日 機材片付け。調査終了（作業日数 54 日）。埋蔵物発見届（2 九歴第 1753 号）提出。
- 8 月 17 日 埋蔵文化財発掘調査終了届（2 九歴第 1804 号）提出。

## 2 調査の組織

発掘作業・整理作業・報告書作成にかかる関係者は以下の通りである。

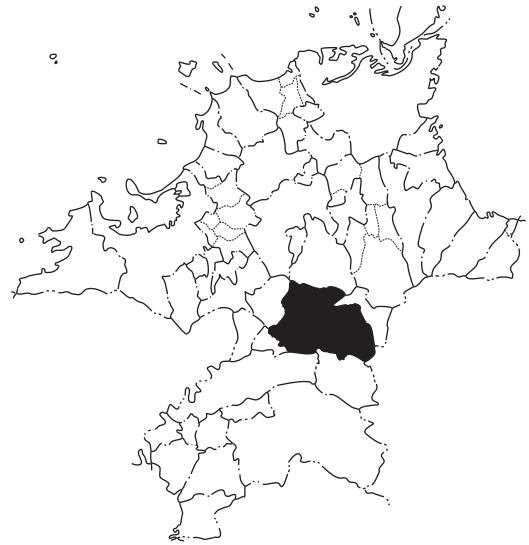
	令和元年度	令和2年度
林野庁九州森林管理局		
局長	原田隆行	小島孝文
計画保全部治山課長	赤星良治	富永雄二
計画保全部治山課治山技術官	村田修也	
計画保全部治山課災害対策分析官		久保田利郎
計画保全部治山課治山技術官	加来尚貴（鳥栖事業所）	加来尚貴（鳥栖事業所）
計画保全部治山課主事	高倉大斗（鳥栖事業所）	高倉大斗（鳥栖事業所）
九州歴史資料館		
館長	杉光 誠	吉田法稔
副館長	安永千里	安永千里
総務室長	中村満喜子	伊藤幸子
総務班長	畑山 智	畑山 智
事務主査	林田朋子	
主任主事	古賀知香	古賀知香
主事	具志堅靖知	具志堅靖知、田中佑弥
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐	小川泰樹	小川泰樹（整理作業担当）
技術主査	岡田諭（発掘作業担当）	岡田諭（発掘作業、報告書作成担当）



## II 位置と環境

### 1 地理的環境

上須川古墳群は朝倉市須川に所在する。遺跡周辺の地形は古処・馬見山地の南側に分布する朝倉低山地である。表層地質は古生代に形成された三郡変成岩類に属する砂質片岩である。基本的に結晶片岩山地であるが、低起伏のためか赤色風化層に覆われている箇所が多い。本遺跡は朝倉低山地の開析谷に面する尾根の西側緩斜面に位置する。表土は森林に由来する腐植土層で層厚は薄い。表土直下は黄褐色の結晶片岩風化土層がある。遺跡周辺の崖面を観察すると、結晶片岩の風化土層下位に結晶片岩の基盤層が見られる。従って、層状に割れる結晶片岩は遺跡周辺では容易に入手可能であり、古墳の石材としてよく利用されている。



第1図 朝倉市の位置

### 2 歴史的環境

#### (1) 旧石器時代

原の東遺跡からナイフ形石器を主体とする製品と石核からなるナイフ形石器文化終末期段階の石器群が確認された他、鎌塚遺跡、上ノ宿遺跡からも同様な石器群が出土した。

#### (2) 縄文時代

原の東遺跡、金場遺跡、上ノ宿遺跡では集石遺構など早期の遺構群が確認されている。他には座禅寺遺跡、長田遺跡から押型文土器が出土した。外之隈遺跡や山田遺跡、天園遺跡では前期の轟B式土器が出土した。矢林遺跡では河川の氾濫に伴う砂礫層から中期後半の並木式土器が出土した。長島遺跡では後期の土器とともに竪穴住居跡や屋外炉が検出されている。上ノ宿遺跡で西平式土器や結晶片岩製の打製石斧が出土した。長田遺跡では後晩期の竪穴住居跡や貯蔵穴などの遺構や後期鐘崎式・太郎迫式土器、晩期黒川式土器などが出土した。貯蔵穴は時期が黒川式で谷部の湧水地を利用しており、また、付近のから出土した石皿は加工場の可能性あるため、ドングリ貯蔵穴の時期、立地、構造、内容物、加工場などが一体となってわかる好資料である。

#### (3) 弥生時代

中道遺跡では弥生時代中期の集落遺跡で、竪穴住居跡 25 軒が調査されたが半数以上が焼失住居であった。上の原遺跡は弥生時代の大集落遺跡である。前期～中期の貯蔵穴 140 基、中期～後期の竪穴住居跡 73 軒が検出され、石剣などの特殊な遺物が出土した。また他時期の遺構からではあるが鑄造鉄斧が出土した。他に甕棺墓 27 基、木棺墓 4 基、土壙墓 2 基が確認された。大庭久保遺跡では中期～後期の墓域が確認され、甕棺墓 38 基、木棺墓 33 基、石蓋土壙墓 9 基土壙墓 40 基、石棺墓 8 基、祭祀遺構が検出された。この内 29 号木棺墓から小型仿製鏡が出土した。西ノ迫遺跡は標高約 130m の高所に築かれた終末期の集落遺跡で竪穴住居跡 3 軒と住居群を圍繞する環濠が検出された。

#### (4) 古墳時代

前期では外之隈遺跡Ⅰ区1号墳は全長21mの前方後方墳で主体部である箱型木棺からは画文帯神獸鏡、蛇紋岩製勾玉、鉄剣が出土した。外之隈遺跡Ⅱ区1号墳は全長16.7mの墳丘墓で6基の埋葬主体から重圜連弧文鏡、飛禽鏡、鉄剣、鉈等が出土した。なお、この古墳から140m北には二段築成の円墳である径約40mの本陣古墳があり、築造時期は後続する。烏集院古墳は全長約30mの前方後円墳と考えられる。下町外畑遺跡1号墳は全長約60mの前方後円墳である。宮地嶽古墳は市指定史跡の全長約50mの前方後円墳であり、北部九州最古級の埴輪が出土した。中期には5世紀中葉の志波宝満山古墳がある。墳形や規模は不明であるが昭和6年の調査では3基の主体部から仿製鏡、直刀、ヤリ、鉄族、短甲、冑等が出土したと伝えられる。後期は6世紀代の全長約71m前方後円墳である剣塚古墳、市指定史跡の装飾古墳で径約20mの円墳である湯の隈古墳、同じく装飾古墳で県指定史跡の狐塚古墳がある。湯の隈古墳は複室構造の横穴式石室で、玄室奥壁と側壁に彩色による装飾が施され、右側壁に円文が3か所確認できる。狐塚古墳は全長15mの複室構造の横穴式石室で、前室奥室共にいわゆる胴張プランである。奥壁には線刻による3艘の船や動物などが描かれている。一方、本遺跡周辺では6世紀後半から終末期にかけて群集墳が増加し、小隈古墳群、須川ノケオ遺跡、宮野古墳群、赤林古墳群、北八坂古墳群、山後山古墳群等が築造される。柿原古墳群では九州横断自動車道の建設に伴う発掘調査で59基の横穴式石室を主体とする古墳群が調査された。副葬品として銅銚帯、銅釧、玉類、耳環、鉄刀、銀製柄頭、馬具、鉄斧等が出土した。またこの地域に特徴的な胴張りプランの横穴式石室は柿原古墳群、金場古墳群、上の宿遺跡群、山田遺跡、志波桑の本遺跡等で見られる。

#### (5) 古代

須川地区には、661年に齊明天皇が百済救援のために宮を移したとされる「朝倉橘広庭宮」の伝承地が存在するが宮の場所は諸説あり、比定に至っていない。また、伝承地の付近には古代寺院である長安寺廃寺がある。既往の調査で、奈良時代の「寺」・「大寺」・「知識」銘の墨書土器、大宰府系の瓦などが出土している。古代官衙の遺跡では、八並遺跡、井出野遺跡が挙げられる。八並遺跡では3間×6間の大型掘立柱建物1棟が確認され、8世紀前半の須恵器片が出土した。また、炭化米が散布することから正倉の存在も想定されるが、総柱建物跡は未確認である。井出野遺跡でコの字状に並ぶ大型掘立柱建物跡や総柱建物跡を圍繞する矩形溝が検出されている。コの字状配置の建物群は官衙政庁に当たることから、両遺跡は上座郡衙関連遺跡であろう。

#### (6) 中世

狐塚南遺跡では土壙墓から舶載の陶磁器が出土し、才田遺跡では平安時代末～鎌倉時代の集落を構成する土坑から舶載陶磁器や国産陶器が多量に出土した。舶載の希少品が大量保有されていることから和名類聚抄に記載がある長淵荘関連の有力者との関係が想定される。

#### (7) 近世

江戸時代の灌漑施設として堀川用水が挙げられる。1663年に開削が始まり、翌年竣工し、筑後川の水を取り込んでできた人工の水路は周辺9箇村で150町歩の新田が開発された。また、1789年には菱野に三連水車が完成し、現在も稼働している。なお、1990(平成2)年には国指定史跡「堀川用水及び朝倉揚水車」として指定された。山田堰は筑後川にかかる堰で、NGOペシャワール会代表の故中村哲医師らによるアフガニスタン復興支援における灌漑用水のモデルとなった。

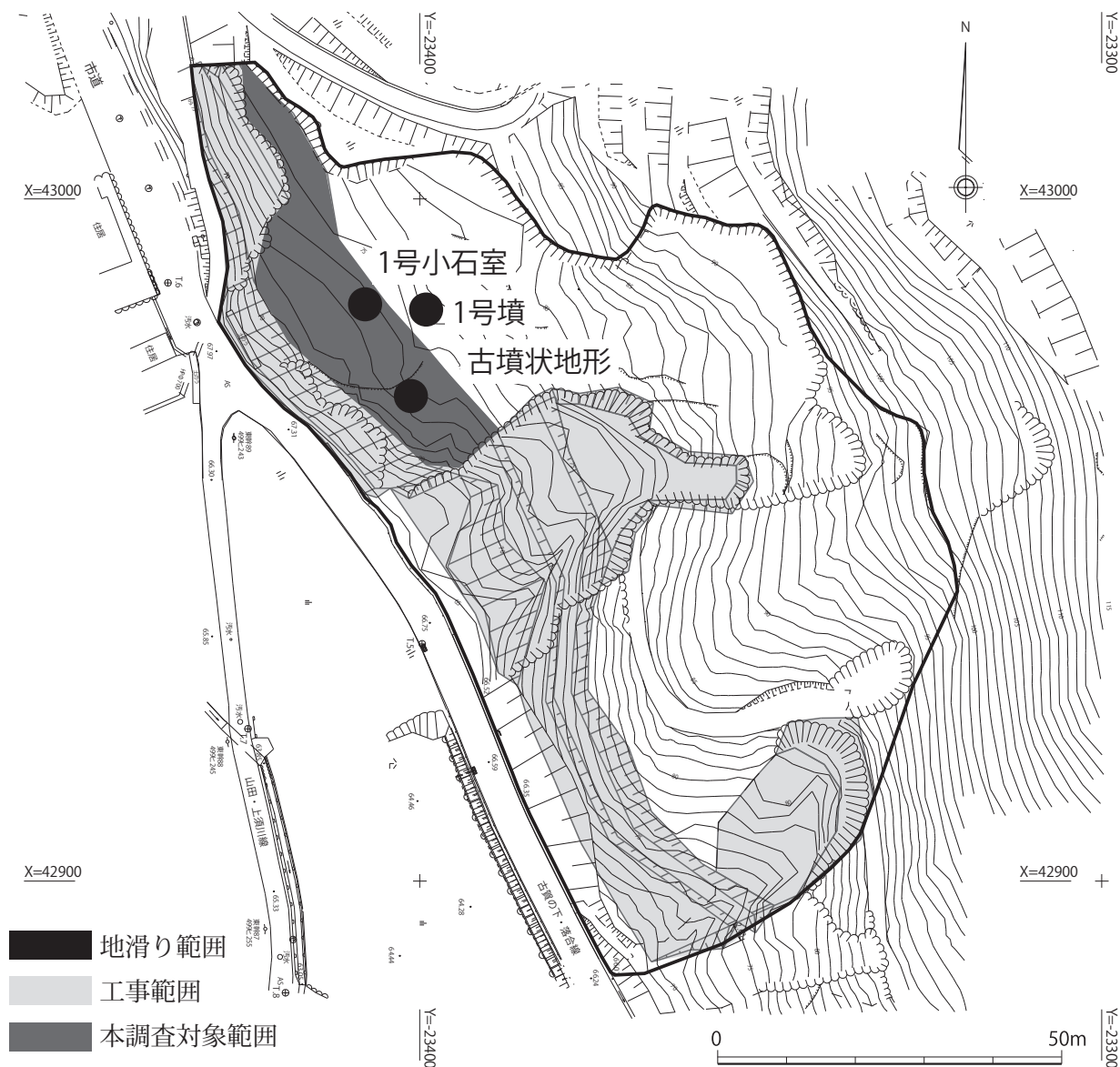




234 鳥集院古墳群、235 北八坂古墳群、236 宮野 A 地区古墳群、237 南淋寺墓、238 南淋寺裏山古墳群、239 南淋寺、240 宮野 B 地区古墳群、241 杉馬場遺跡、242 垣添遺跡、243 立野古墳群、244 宮地嶽東方古墳群、245 宮地嶽北方古墳群、247 宮地嶽古墳群、宮地嶽前方後円墳、湯の隈装飾古墳、250 志賀様の大樟、255 宮野脇遺跡、256 中宮野神社内古墳、257 上川原遺跡、258 長安寺原遺跡、259 降葉山古墳群、260 朝間神社遺跡、261 長安寺窯跡、262 長安寺廃寺跡、263 伝朝倉宮土壇跡、264 向別所遺跡、265 高島遺跡、266 牟田谷古墳、267 上須川第 3 号窯跡、268 上須川第 2 号窯跡、269 小隈古墳群、270 上須川第 1 号窯跡、273 蓮輪遺跡、274 前畑遺跡、275 饗田谷遺跡、277 八並遺跡、278 井出野遺跡、279 朝倉小学校遺跡、287 榎町遺跡、288 須川 A 遺跡、289 須川 B 遺跡、290 古毛遺跡、291 三島の下遺跡、292 八坂古墳群、293 一の宮古墳、294 八坂第 4 号墳、295 一の坂古墳群、296 山後山古墳群、297 須川ノケオ遺跡、298 虚空蔵山古墳群、299 サンパ山古墳、300 三十歩古墳、301 たぬき穴古墳群、302 三反田第 3 号墳、303 三反田古墳群、304 上須川石棺群、**305 上須川古墳群**、306 上須川山田遺跡、307 上須川遺跡、308 中妙見遺跡、309 原菱野遺跡、310 原の東遺跡、311 小松原遺跡、312 本村遺跡、313 剣塚古墳、314 剣塚遺跡、315 剣塚第 2 号墳、316 妙見古墳群、317 鎌塚遺跡、318 山の神遺跡、319 山ノ神古墳群、320 山田ウラ山古墳群、321 長田古墳、322 山田古墳群、323 長田遺跡、324 金場遺跡、325 上ノ宿遺跡、326 恵蘇山遺跡、331 恵蘇山古墳群、335 山田柳古墳群、336 稗畑遺跡、337 大迫遺跡、338 本陣古墳、339 本陣山城跡、372 奈良ヶ谷古墳群、373 麻底良城跡と麻底良神社、392 宮地嶽神社、393 名称未定

第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)





第3図 調査対象地位置図 (1/1,000)

【参考文献】

- 福岡県教育委員会 1984 『柿原古墳群 I』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -4-
- 福岡県教育委員会 1986 『柿原古墳群 II』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -6-
- 福岡県教育委員会 1990 『上の原遺跡 I』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -18-
- 福岡県教育委員会 1991 『上ノ宿・恵蘇山・稗畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -20-
- 福岡県教育委員会 1993 『上の原遺跡 II』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -27-
- 福岡県教育委員会 1994 『長田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -30-
- 福岡県教育委員会 1995 『上の原遺跡 III』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -33-
- 福岡県教育委員会 1995 『外之隈遺跡 I』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -35-
- 朝倉町教育委員会 1997 『矢林遺跡』朝倉町文化財調査報告書第 6 集
- 朝倉町教育委員会 2000 『朝倉町の古墳と埴輪』朝倉町文化財調査報告書第 9 集
- 朝倉市教育委員会 2009 『八並遺跡 井出野遺跡』朝倉市文化財調査報告書第 5 集
- 朝倉市教育委員会 2016 『上須川遺跡』朝倉市文化財調査報告書第 27 集
- 甘木歴史資料館 2017 『温故』第 58 号

# III 発掘調査の記録

## 1 概要

調査対象地は工事範囲の内、試掘調査で遺構遺物が確認された範囲である（第3図）。発掘作業では、トレンチの設定に先立ち、調査範囲の地形測量を実施した（第4図）。市の試掘調査で確認された1号墳や古墳状の高まりの他、地すべりや陥没、円弧滑り等が随所に認められたが、地形上の高まりや平坦部を中心にトレンチを設定し、遺構・遺物の確認に努めた。市の試掘では1号墳を確認した1トレンチ、小石室を確認した2トレンチ、古墳状の高まりに対して設定した3トレンチ、1号墳の前面平坦部に設定した4トレンチがある。この内、1号墳は工事の影響範囲から除外されたため、調査対象とせず、地形測量にとどめている。本調査では試掘2～4トレンチを拡張し、さらに地形測量の結果を踏まえ、5～9トレンチを設定し、発掘作業を実施した。

基本層序は表土（腐葉土）、地山の二次堆積層、地山（結晶片岩の風化土層）である。基本的に表土は薄く、5～10cm程度で、平坦部では表土直下が地山である。

## 2 1号トレンチ 1号墳（第4図）

市の試掘トレンチである。地形測量の結果、直径約11mの円墳と推定される。墳丘中心部は陥没しているが、石材等は地表に現れていない。トレンチは墳丘裾部分に設定され、結晶片岩の石とともに土師器、鉄鏃が出土した。

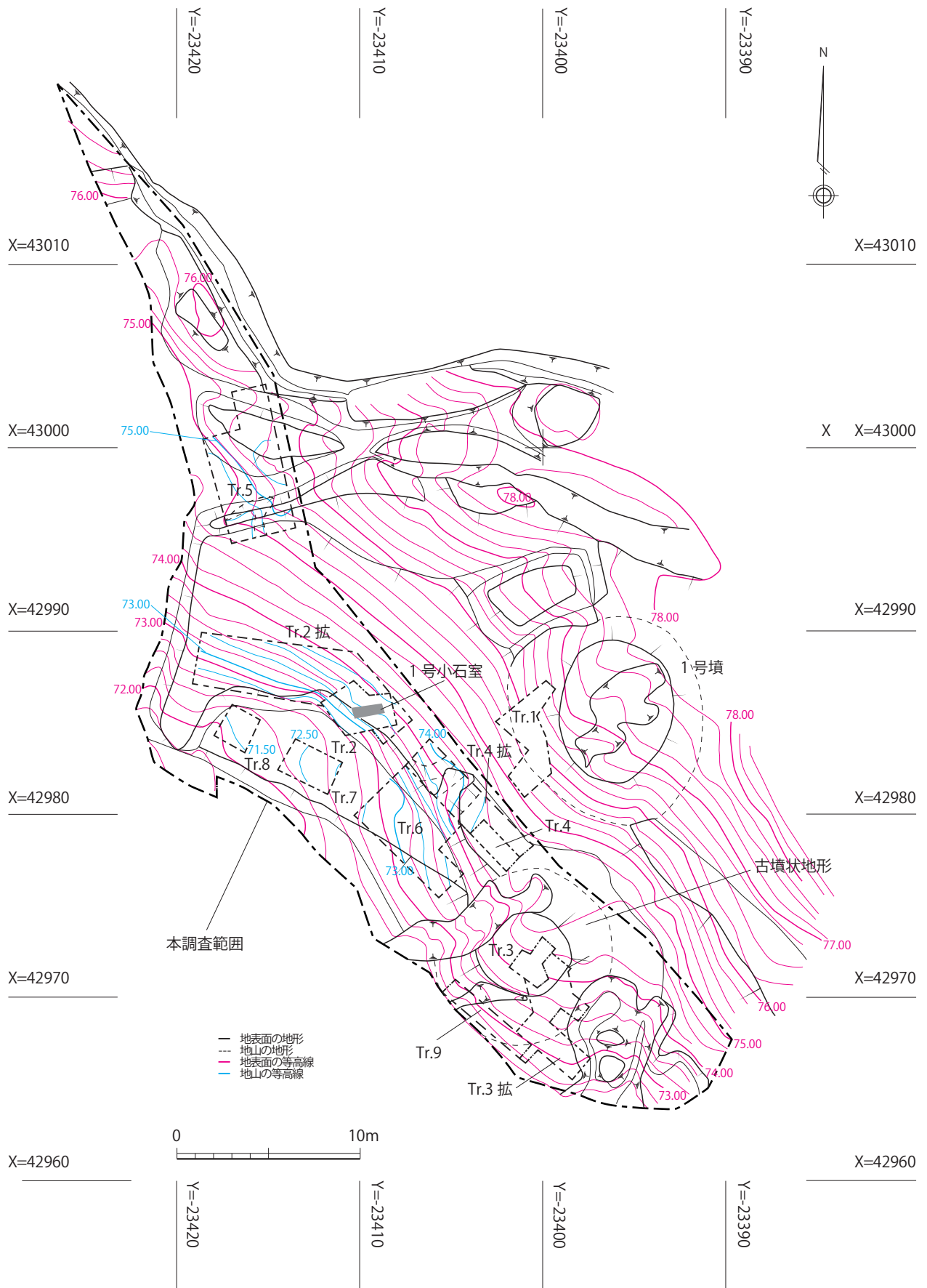
## 3 2号トレンチ 1号小石室（第4、5図）

市の試掘トレンチでは若干石材が露出していた1号小石室を確認した。本調査では1号小石室が位置する場所と連続する緩斜面に対してトレンチを拡張し、同様の遺構の存在について確認したが、1号小石室以外の遺構はなく、人工的な地形改変も見られなかった。

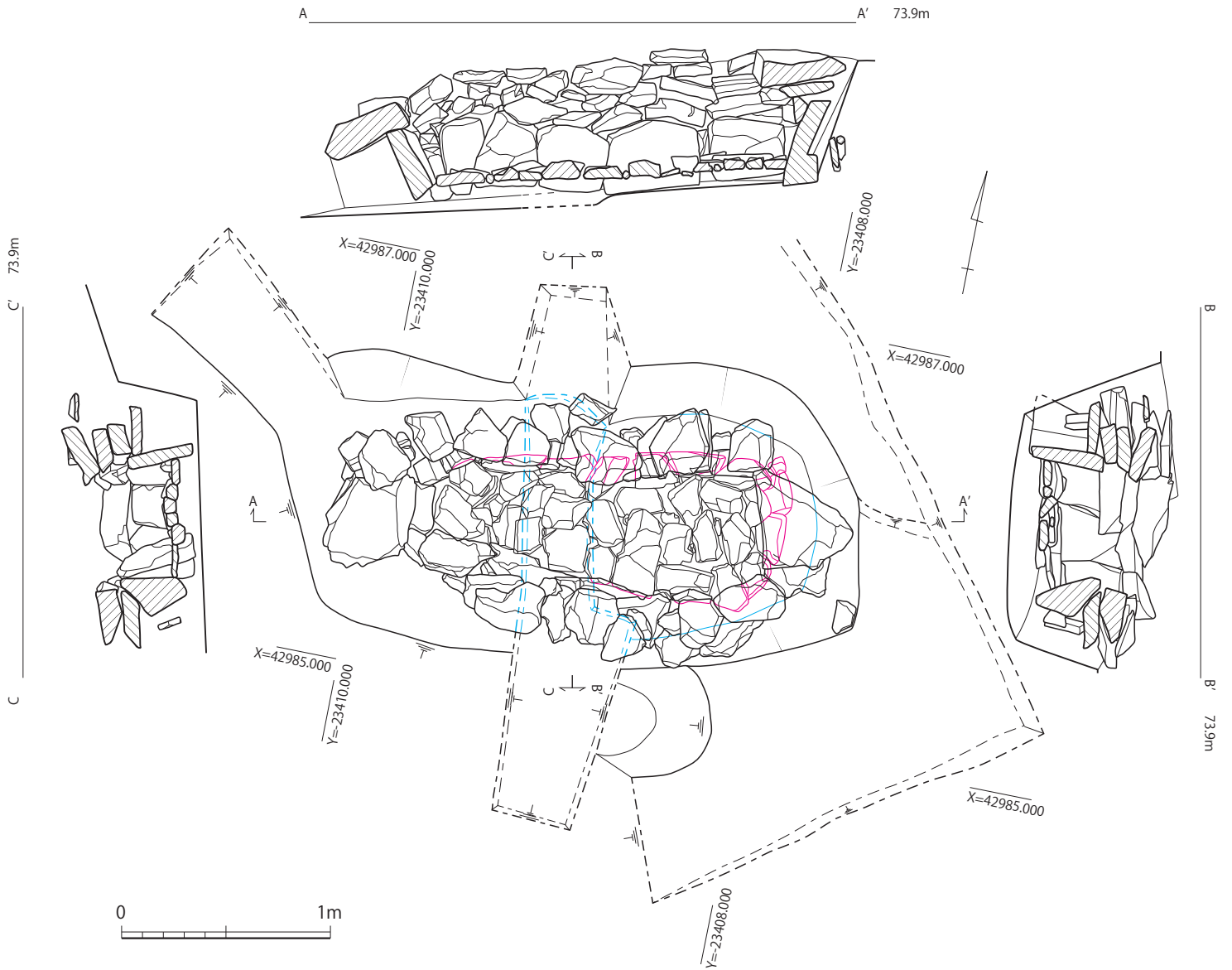
1号小石室は1号墳の西側約10mに位置し、主軸を東西にとる竪穴式石室である。石室西側小口及び南側側壁は石材が若干傾いているが、東側小口及び北側側壁は当初の形状を保っている。石室の検出規模は長軸254cm、短軸133cm、検出面から石室床面までの深さは58cmである。石室床面は長軸173cm、短軸77cmで、平面形は舟形を呈する。石室を構築する際の墓壇は長軸260cm以上、短軸150cm、深さ58cmの不整形な長方形、あるいは舟形を呈する。使用する石材は結晶片岩で、側壁は基底部を大型の板石を立てて構築し、墓壇との間に裏込めの土を充填し、その上にやや大きめの板石を平置きしながら、持ち送るように構築する。一方、床面は小ぶりの石材を平置きして敷き詰め構築する。石室内の流入土や裏込土から直接時期を決定づける遺物が出土しなかったため確定的ではないが、周辺から出土する遺物は古墳時代後期以降のもののみであるため、古墳時代後期の石室と考えられる。

## 4 3・9号トレンチ 古墳状地形（第4、7図）

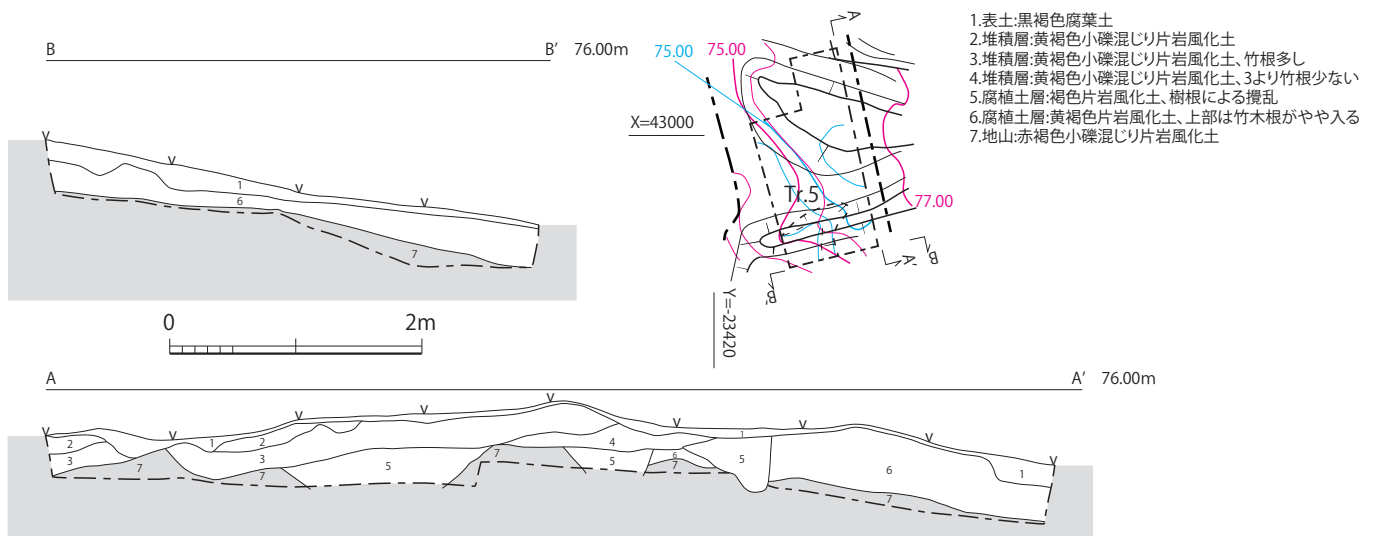
3トレンチは市の試掘トレンチで、直径約9mの古墳状の高まりの頂部に設定された。この地形の北側には地下水の流出に起因すると考えられる陥没が带状に走り、南側は円弧滑りによる土砂の流出個所が確認できる。また、西側斜面には小規模な陥没があった。試掘トレンチから大型の結晶



第4図 調査区全体図 (1/300)



第5図 1号小石室実測図 (1/30)



第6図 5号トレンチ土層断面図 (1/60)



片岩の板石が検出されたため、古墳の可能性があるととして、トレンチを拡張するとともに、西側に石室の羨道があるか否かを確認するために9トレンチを設定し調査を行った。3トレンチ拡張の層序は表土、結晶片岩の小片を含む地山の二次堆積層（褐色→暗褐色→黒褐色）、地山であり、いずれの層も約14度の角度で傾斜している。黒褐色の二次堆積層の直下には一辺150cm程度の大型の結晶片岩が検出された。地山の傾斜と同じで古墳の石室を構成するような在り方ではない。一部の石を取り上げたが、直下は地山であり、検出した石は古墳とは無関係であると結論付けた。

9トレンチは古墳状の高まりの地形の西側にあった小規模な陥没を含む形で設定した。当初陥没が古墳の羨道などの痕跡に係る可能性を考慮して調査したが、トレンチの断面観察の結果、二次堆積層や風倒木痕が確認されたのみであり、古墳に関係するものは認められなかった。

3トレンチと9トレンチの結果から、古墳状の高まりは古墳ではなく、地すべりなどの自然現象によって土砂がたまり円丘状になったものと考えられる。しかし、検出した大型の石の直上層（黒褐色土）から土師器などの遺物が出土したため、土砂の流出元には何らかの遺構があった可能性がある。

#### 5 4・6号トレンチ（第4図）

4トレンチは1号墳の前面平坦部に設定されたトレンチである。本調査では4トレンチを拡張するとともに、4トレンチの西側の一段下がった平坦面にも6トレンチを設定し、古墳前面の遺構確認を行った。4トレンチ拡張では表土直下が地山で、一部に古墳に向かうような窪みを確認したが、墓道か否か判然としない。6トレンチは表土直下が地山で、地山の傾斜は地表とほぼ変わらず、遺構は認められなかった。遺物は表土中から須恵器の小片が出土したのみである。

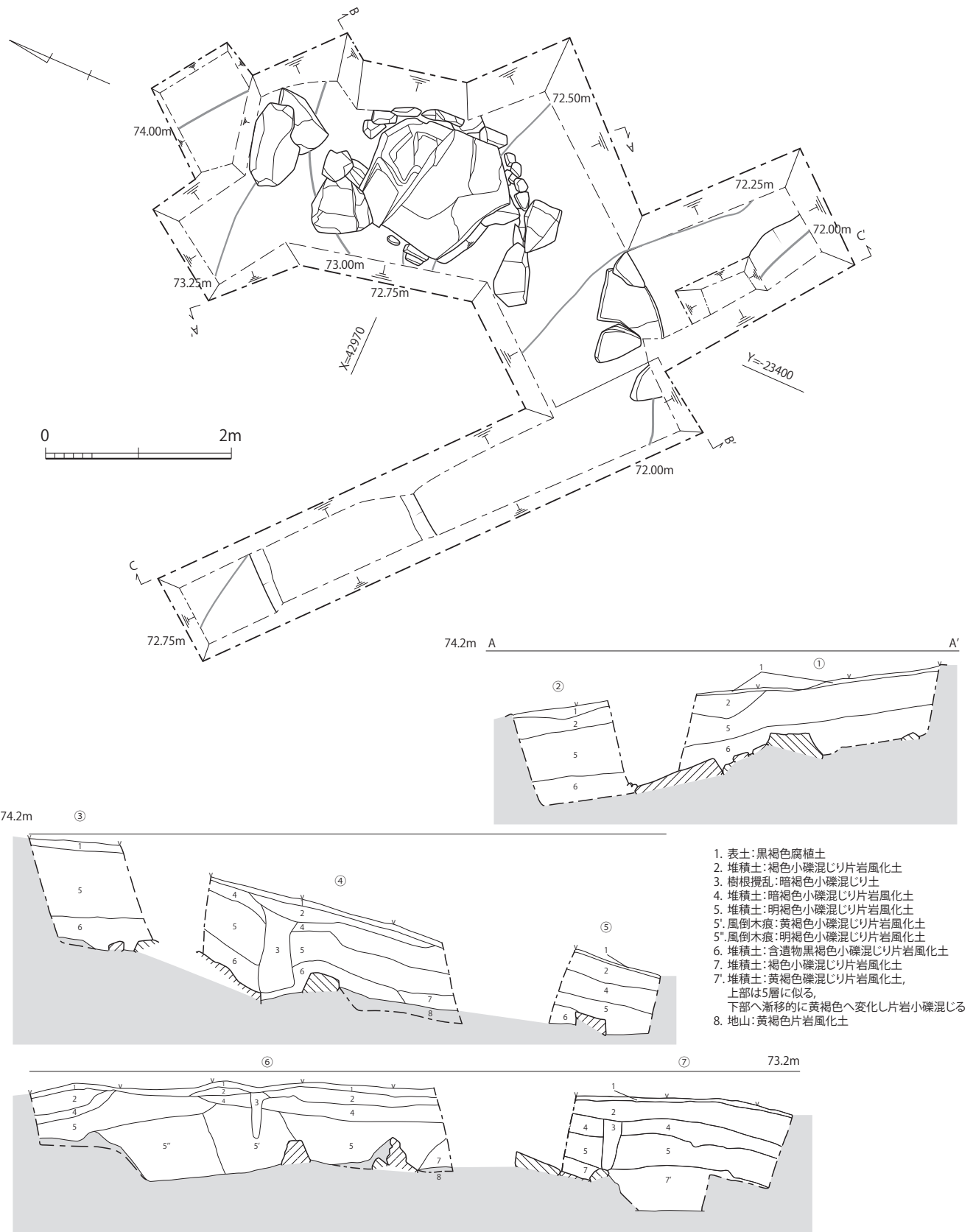
#### 6 5号トレンチ（第4、6図）

地形測量の結果、調査区北側で低い高まりを確認したため、本調査において設定したトレンチである。層序は表土、地山の二次堆積層、地山である。地山上面では遺構は確認されず、トレンチの断面観察の結果、地形測量で確認した高まりは、土砂の二次堆積で古墳ではないことが確認できた。周辺の地形を改めて観察すると、北側には地すべりによる崖や崩落土が溜まった個所がある。また、東側には地下水が抜けたような亀裂が5トレンチに向かって走っており、この地形が地すべりや崩落などによって流出した土砂が堆積してできたものであると考えられる。遺物は須恵器壺の可能性のある破片が出土した。

#### 7 7・8号トレンチ（第4図）

2トレンチの南側、一段下の平坦面に設定した。表土直下が地山で、地山の傾斜は地表面とほぼ変わらず、遺構は認められなかった。遺物は須恵器の小片が数点出土したのみであった。

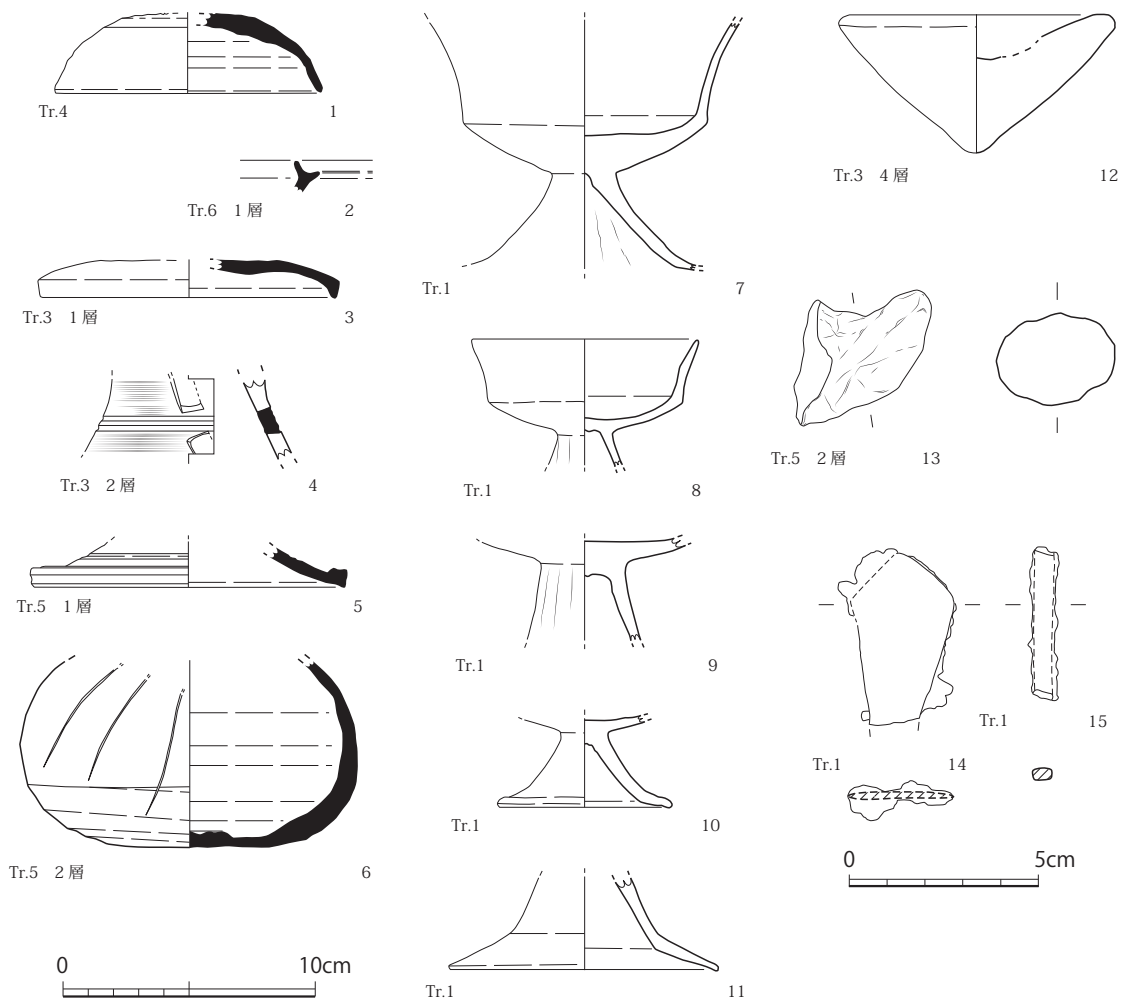




第7図 3・9号トレンチ平面図及び断面図 (1/60)

## 8 出土遺物（第8図）

1は4トレンチ拡張から出土した須恵器坏蓋である。復元口径10.5cm、器高3.2cm、器面調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。また、天井部内面に焼きぶくれがある。2は6トレンチの表土から出土した須恵器坏身受け部の破片である。小片であるため口径は不明である。受け部の立ち上がりは短い。3は3トレンチの表土から出土した須恵器坏蓋である。端部は嘴状に折れ曲がる。復元口径11.9cm、器高1.5cm、器面調整は天井部外面に回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。4は3トレンチ2層（地山の二次堆積層）から出土した須恵器高杯の脚部である。長方形の透かしが2箇所あり、その間には2条の沈線が巡る。外面には器面調整は外面がカキメ、内面がナデである。5は5トレンチの表土から出土した須恵器高杯の脚裾部である。復元底径は12.6cm、端部は肥厚し断面四角形を呈し、上面に沈線が1条施される。また、裾部に2条の浅い沈線が施さる。6は5トレンチ2層（地山の二次堆積層）から出土した須恵器壺あるいは平瓶の胴部である。肩部より上位が欠損しているため器種の同定が難しい。底径は5.2cm、最大胴径は13.4cm、残存器高7.4cmである。器面調整は底部が回転ヘラケズリ、ナデ、胴部から上位はナデである。外面胴部下位から欠損している肩部を通り、対面の胴部にかけてヘラ記号が施される。図化した部分は3条だが、対面には4条分確認できたため、連続するものであれば4条の線が施されたことになる。底部内面中央には粘土紐がとぐろを巻いている状態が残っており、器面調整が不十分である様子が確認できる。7～11は1トレンチから出土した土師器高杯である。7は口縁端部と脚裾部を欠くが残存口径12.3cm、残存裾部径9.0cm、残存器高9.8cmである。坏部の形状は口縁部が外反し、脚部はハ字状に開く。器面調整は内外面共にナデであり、坏部口縁付近に黒斑が付く。胎土に赤褐色粒が含まれる。8は高杯坏部と脚部の一部である。復元口径9.0cm、口縁は外反する。脚部はヘラケズリによって12面に面取りされている。9は高杯の坏部底部と脚部である。器面調整は基本的にナデであるが、脚部は不明瞭ながら面取りされている。10は高杯の坏底部から裾部である。復元底径は3.7cm、残存器高3.7cmである。脚部はハ字状に開き、裾は屈曲して広がる。器面調整は内外面共にナデであり、脚部は不明瞭ながら面取りされている。11は高杯の脚部と裾部である。復元底径は10.6cm、残存器高は3.7cmである。裾部は屈曲して広がり、内面には明瞭な稜がある。12は3トレンチ拡張4層から出土した器種不明土師器である。復元口径11cm、器高5.5cm、器厚は口縁部で約1.0cm、底部は3.8cm。口縁端部は丸く、底部は尖底である。器面調整は内外面ナデであるが、底部内面には布圧痕のようなものが見られるが範囲が狭小であり確定的ではない。胎土に3～8mm程度の小礫をわずかに含む。内外面に黒色の煤のようなものが僅かに付着する。器種・用途共に不明だが、鍛冶関係のものであろうか。13は5トレンチの2層（地山の二次堆積層）から出土した甗の把手である。先端は先細り、上方に反り上がる。胴部との接合部には空隙があり、十分に粘土を充填していない。14・15は1トレンチから出土した鉄鏃である。14は圭頭鏃の鏃身部である。残存長4.6cm、最大幅2.7cm、推定厚0.2cm、重量10.0gである。15は天地不明であるが、鉄鏃の茎部である。残存長4.0cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重量3g、断面長方形を呈する。



第8図 出土遺物実測図 (1~13=1/3、14,15=1/2)

## IV おわりに

試掘で古墳の可能性があるとされた地形の高まり（3トレンチ）は本調査の結果、自然地形であることが判明した。また、本調査における地形測定の結果確認された地形の高まり（5トレンチ）も自然地形であり、平坦部には明確な遺構は存在しなかった。従って、今回の試掘及び本調査で確認された遺構は古墳1基、小石室1基である。

本調査には至らなかったが1号墳の試掘調査では遺物が出土している。墓前祭祀に伴うと考えられる土師器の高杯と副葬品の一部と考えられる鉄鏃である。本遺跡から500m南に位置する上須川遺跡では圃場整備に伴って9000m<sup>2</sup>が調査され、9基の古墳が検出された。これらは全て墳丘を消失していたが、玄室の平面形態が胴張プランのもので、6世紀代に古墳築造のピークを迎える。この内、3号墳羨道付近や1地点32区から小型の土師器高杯が出土している。1地点32区出土のものは第8図7の高杯よりやや小ぶりだが、全体の形態はよく似ている。4号墳では圭頭鏃などの鉄鏃や玉類、留金具等が副葬されていた。本遺跡1号墳出土の遺物も同様の時期と考えられる。在地の形式である圭頭鏃が出土していることに共通点が見いだされる。

1号小石室については直接時期を決定づける遺物が出土していないため、近隣の遺跡の遺跡である柿原古墳群 C-46号石室と比較検討する（福岡県教育委員会 1986『柿原古墳群の調査Ⅱ（Ⅰ地区）』中巻 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-6-）。C-46号は本遺跡例と異なり主軸を南北に置く石棺系竪穴式石室であるが、石室床面内法が長軸 1.81m、短軸 0.8～0.52m と本遺跡例と近似する。また、構築方法も墓壙を掘削した後、大型の板石を立てて壁面を構築し、これより上は平積みする点や床面を小ぶりの結晶片岩で敷き詰める点も共通する。報告書によると出土遺物がないため時期の確定ができないが、石棺系竪穴式石室の最終形態と把握されている。柿原古墳群の報告書では本例のような竪穴式石室・石棺系竪穴式石室について分析がなされており、その記述によると、C-46号石室は平面形が舟形、側壁基底部が板石を立てて構築、側壁上半のせり出しが強い、などの特徴から B2 類に分類され、5世紀後半以降 6世紀後葉までの年代が与えられている。従って、先行研究の成果を援用すれば、石室の構造上、5世紀後半以降 6世紀後葉までの時期が考えられるのではないだろうか。次に遺物の面から検討すると、石室から直接出土した遺物がないため、周辺から出土した遺物の時期から類推するしかない。1号墳に関する遺物は先述の通り、6世紀代のものと考えられる。4号トレンチから出土した須恵器坏蓋（第8図1）は天井部と体部の境目不明瞭且つ沈線が無いいため小田富士雄編年ⅢB～Ⅳ期であろう。第3トレンチ1層から出土した須恵器坏身（第8図2）は受部の立ち上がり短いため、同編年Ⅳ期であろうか。3号トレンチ2層から出土した須恵器高杯脚部は2段の方形透かしが施されるため、同編年Ⅲ期であろう。3号トレンチ1層から出土した須恵器坏蓋（第8図3）は口縁部のかえりが消滅しているため、8世紀にはいるものであり、時期が下る。以上、周辺遺物の検討から、小田富士雄編年Ⅲ～Ⅳ期、6世紀中葉～7世紀初葉の幅で考えられるのだが、石室構造と合わせると1号小石室の時期は6世紀後半と考えられる。

以上、検討を加えた結果、今回調査で確認された1号墳と1号小石室について、6世紀後半のものであると考えられるのだが、今回調査では8世紀代の須恵器の出土もあるため、周辺に該期の遺跡が存在する可能性がある。本遺跡が立地する場所は地すべり地帯であり、遺跡周辺も昨今の自然災害によって遺跡が崩壊する可能性がある。今後も周辺の遺跡について注視していかなければならない。

#### 【参考文献】

福岡県教育委員会 1986『柿原古墳群Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-6-  
朝倉市教育委員会 2016『上須川遺跡』朝倉市文化財調査報告書第27集  
舟山良一 1998「3須恵器の編年 2九州」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器 雄山閣  
秦憲二 2010「鉄鍬から見た磐井の乱」『先史学・考古学論究Ⅴ』下巻

# 写真図版





1.2号トレンチ拡張掘削  
前(南から)



2.2号トレンチ作業風景  
(東から)



3.2号トレンチ1号小  
石室検出状況(東から)







1.2号トレンチ1号小石室埋没状況（東から）



2.2、7、8号トレンチ調査状況（東から）



3.1号小石室と1号墳（西から）



1.2号トレンチ1号小石  
室床面検出状況（西か  
ら）



2.2号トレンチ1号小石  
室床面検出状況（南か  
ら）



3.2号トレンチ1号小石  
室床面検出状況（北か  
ら）







1.2号トレンチ1号小石室（metashapeで作成）



2.2号トレンチ1号小石室完掘状況（北から）



3.3号トレンチ拡張前状況（北から）



1.9号トレンチ掘削前  
(北から)



2.3号トレンチ拡張石検  
出(東から)



3.3号トレンチ拡張石検  
出(西から)







1.3号トレンチ拡張石検出（南から）



2.3号トレンチ拡張石取上後（東から）



3.3号トレンチ拡張断面



1.3号トレンチ拡張断面  
2



2.3号トレンチ拡張断面  
3



3.3号トレンチ拡張断面  
4







1.3号トレンチ拡張断面  
5



2.3号トレンチ拡張断面  
6



3.3号トレンチ拡張断面  
7





1.6号トレンチ掘削前状況（北から）



2.4、6号トレンチ完掘状況（東から）



3.5号トレンチ掘削前状況（南から）





1.5号トレンチ完掘状況  
(北から)



2.5号トレンチ東壁断面



3.7号トレンチ掘削前状  
況(南から)





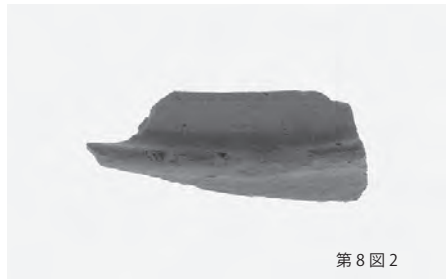
1.8号トレンチ掘削前状況（北から）



2.7、8号トレンチ完掘状況（北から）



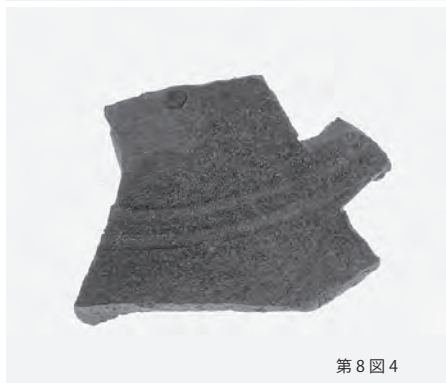
第8図1



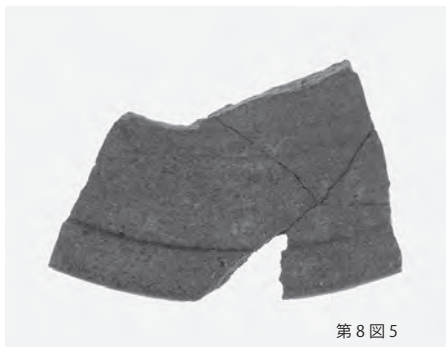
第8図2



第8図3



第8図4



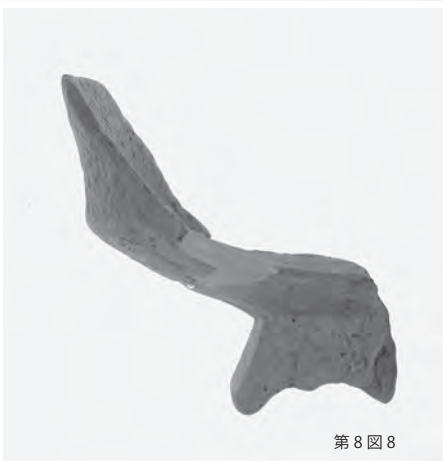
第8図5



第8図6



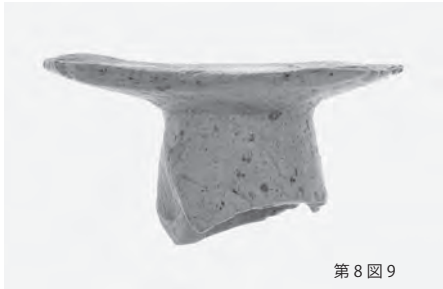
第8図7



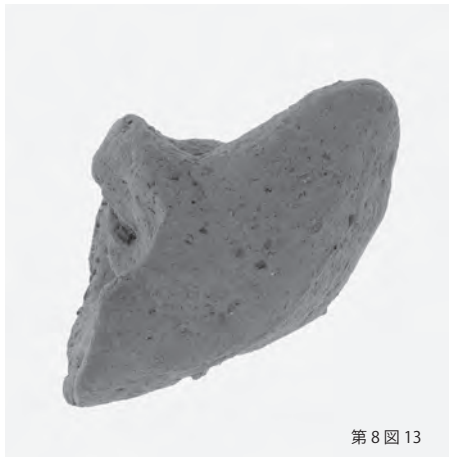
第8図8



第8図12



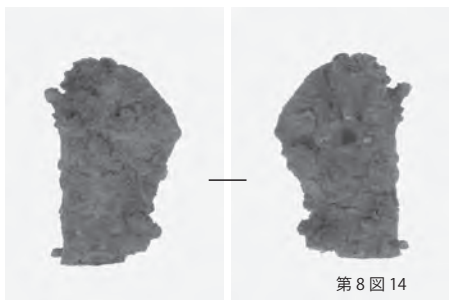
第8図9



第8図13



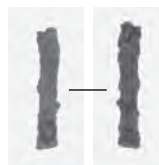
第8図10



第8図14



第8図11



第8図15

報告書抄録

ふりがな	かみすがわこふんぐん							
書名	上須川古墳群							
副書名	林野庁朝倉地区治山工事（須川3）関係埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岡田 諭							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3							
発行年月日	令和3（2021）年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみすがわこふんぐん 上須川古墳群	福岡県 朝倉市須川	40448		33° 23′ 14″	130° 44′ 55″	2020.1.14 ） 2020.7.31	700m <sup>2</sup>	開発事業 （治山工事）
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
古墳	古墳	竪穴系石室		須恵器、土師器、 鉄器		古墳時代後期の 竪穴系小石室を 検出した。試掘 によって本調査 区外に古墳（円 墳）1基を確認 した。		

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
2	3

林野庁朝倉地区治山工事（須川3）  
関係埋蔵文化財発掘調査報告

## 上須川古墳群

令和3（2021）年3月19日

発行 九州歴史資料館  
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所  
朝倉市馬田336